

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 10 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520530

研究課題名（和文）言語転移の双方向的検討—日本語の連体修飾構造の習得を中心に—

研究課題名（英文）Bidirectional Study of language transfer: Focus on the Japanese Noun phrase

研究代表者

奥野 由紀子 (OKUNO YUKIKO)

横浜国立大学・留学生センター・准教授

研究者番号：80361880

研究成果の概要（和文）：言語転移のメカニズムについて、日本語の名詞句を対象として対照研究、誤用分析を行った後、各言語母語話者に調査を実施し、言語双方向的に検討した。被調査者は L1 日 L2 中と L1 中 L2 日、L1 日 L2 韓と L1 韓 L2 日であった。その結果、誤用の傾向は必ずしも表裏一体ではなく、言語間で「一致」が易しく、「不一致」が難しいという従来の予測とも異なり、従来の研究方法では予測できなかった事実が明らかになった。言語双方向的アプローチは言語転移のメカニズムを明らかにする手法としてその有効性を指摘した。

研究成果の概要（英文）：The mechanism of language transfer was examined in bidirectional, focus on the Japanese noun phrase. Investigators were L1Japanese-L2Chinese, L1Chinese-L2Japanese, L1Japanese-L2Korean, and L1Korean-L2Japanese. The tendencies of the result of misuse were not necessarily two sides of the same coin. That is, it differed from the conventional prediction it is supposed that the case where usage is in agreement is easy, and the cases of not being in agreement differ. It is said that the fact which was not able to be predicted in the conventional method of research became clear. Language bidirectional approach is effective as the technique of clarifying the mechanism of language transfer.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：第二言語習得研究

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：言語転移・双方向的検討・連体修飾構造・「の」・日本語学習者・中国語学習者・韓国語学習者

1. 研究開始当初の背景

現代的解釈における言語転移研究は従来の言語転移と同じ視座からなされているわけではないが、その方法論的課題による言語転移の認証の難しさから、その原理は依然明らかではない。言語転移研究の第一人者 Odlin(1989)は、言語転移を明らかにするには、対照分析による言語間の構造的比較から母語を異にする2つあるいはそれ以上のグループ間の言語運用の比較が有用かつ必要であるとしている。さらには、言語転移研究に今後望まれる最も重要な研究領域の一つに双方向的研究(Bidirectionality)を挙げ、それにより、転移に影響を与える一般的構造原理(general structural principles)が明らかになると言及しているが、体系的な双方向的研究は未だほとんどなされておらず、日本語教育に至ってはこれまでなされていなかった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は従来の言語転移研究のアプローチとは異なる言語双方向による調査により、第二言語習得過程における言語転移に影響を与える条件を実証的に明らかにすることである。具体的には、以下の4グループの学習者を対象にした連体修飾構造の理解及び算出データにおける「の」「的」「ui」の使用に着目する。

中国語を母語とする日本語学習者

↑

↓

日本語を母語とする中国語学習者

韓国語を母語とする日本語学習者

↑

↓

日本語を母語とする韓国語学習者

## 3. 研究の方法

### (1) 日本語学習者の使用傾向の把握

まず、日本語学習者の名詞句の使用実態を把握するために、KYコーパス(口頭能力を測るための30分のインタビューを初級・中級・上級・超級学習者90名へ実施し、文字化しまとめたもの)から英語・韓国語・中国語を母語とする学習者の産出傾向を探り、どのような修飾部のときに脱落がおきやすいのかを質的に分析し、把握した。その結果、脱落にはある語彙のときにおきやすく、それは学習者の「置き換えのストラテジー」による可能性が高いことが明らかとなった。またもうひとつの原因としてやはり母語の影響による言語転移の可能性があることがわかった。

→論文⑤として発表した。

### (2) 対照言語学的相違の把握

韓国語と日本語、中国語と日本語の言語学的相違に考慮して、「の」に相当するものの有無、修飾部とヘッド(後項名詞)の意味的關係により詳しい対照研究を行った。そして、それらをもとに調査項目を選定した。

→論文⑦として発表した。

### (3) 調査項目の作成

調査項目は、韓国語・中国語と日本語の「の」に相当するものの有無を考慮して以下のカテゴリーで作成した。

1. 韓・中国語「の」有 日本語「の」有
2. 韓・中国語「の」無 日本語「の」有
3. 韓・中国語「の」随意 日本語「の」有
4. 「置き換えのストラテジー」による脱落  
さらに、韓国語については、修飾部とヘッドの關係が固有語と漢語の組み合わせによって、脱落の生じやすさに違いがでるかを知るために各カテゴリーに以下の4つの組み合わせによる問題文を作成、選定した。

1. 固有語＋漢語
2. 固有語＋固有語
3. 漢語＋固有語
4. 漢語＋漢語

(4) 韓国語と中国語母語話者への調査を実施  
韓国と中国で学習する日本語専攻の大学

生を対象に実施した。まず、日本語レベルを測るためのテストを実施し、次に即時的な文法性判断テスト、そして知識をみるための誤用訂正テストの3種を、韓国と中国の日本語学習者に対して実施した。

その結果、韓国語で修飾部とヘッドの関係が固有語と漢語の組み合わせよりも漢語＋漢語の組み合わせによって、脱落が生じやすい傾向であることと、韓国語では「の」に相当するものが任意であり、日本語では「の」が必要な際に正答率が高いことが明らかとなり、韓国語学習者は、漢語による結束性と共に、韓国語では「の」に相当するものが任意の場合には「の」を入れた方が正答率が高いとする学習者特有の認知的な判断が働いていることが明らかとなった。

また、中国語母語話者は「の」に相当するもの有無が日本語と一致しているものほど、正答率が高く、中国語母語話者は「の」に相当するものの一貫性によって判断していることが明らかとなった。

これら韓国語と中国語母語話者と比較した結果、同じ漢字圏であっても母語と日本語との対応関係により判断基準に違いがあることが明らかとなった。

→論文③として発表した。

(5) 中国語を学習する日本人学習者の使用傾向の把握

北京言語大学(中国)のホームページに公開されている「HSK 動的作文コーパス」から日本人学習者の「的」の使用傾向を観察した。

「日本語では「の」を使うが、中国語では“的”を使わないケース」と「日本語では「の」を使うが、中国語では“的”を使っても使わなくてもよいケース」をそれぞれ8ケースと3ケースに整理し、HSK 動的作文コーパスから、そのケースごとの、「的」の過剰使用の実数を洗い出した結果、以下の3ケースにおいて誤用が多いことが明らかとなった。

- a 修飾部が指示詞による定指示である場合
- b 修飾部が数詞や序数詞フレーズである場合
- c 修飾部が列挙フレーズで、日本語では「など」、中国語では「等」が用いられる場合

→論文④で発表した

(6) 日本語母語話者への調査を実施

日本において、韓国語、中国語を専攻とする大学生を対象に調査を実施した。韓国語検定試験、中国語検定試験の結果、使用教科書、学習歴などから、日本語学習者と同様のレベルの学習者を対象とした。

そして、日本語バージョンの韓国語バージョンをまず実施した。次に中国語学習者に対しては、修飾部とヘッドとの意味による誤用傾向に留意した、翻訳課題と聴解再生課題を実施した。

中国語学習者に対して、異なる調査方法を用いたのは、論文④により明らかとなった修飾部とヘッドの意味的な関係による誤用の傾向を双方向的に探るためである。

(7) 日本語学習者と韓国語学習者の双方向的検討

双方向的検討の結果、日本語を母語とする韓国語学習者の場合では予測と異なり、言語構造(「の」や「의」の有無)が一致している場合の成績の方が低かった。また、韓国語を母語とする日本語学習者には「の」の脱落が起きやすいが、その裏返しとして予

測し得る、日本語を母語とする韓国語学習者日 L2 韓における「의」の付加傾向は明確に認められなかった。対照言語分析時代の難易度階層仮説より、言語間で「一致」しているものは「不一致」より「易」しいという予測がこれまで当然だとされてきたが、このように従来の研究方法では予測できなかった事実が明らかになったといえる。これまで「当然そうだろう」とされてきた言語転移の新たな実態や様相が伺え、言語間の双方向からのアプローチは、言語転移の原理を検討する新しい方法の一つとして、その有効性を指摘し得た。

#### (8) 中国語を母語とする日本語学習者への追調査を実施

日本語を母語とする中国語学習者への調査と同様の中国語バージョンでの翻訳課題と聴解再生課題を、追調査にて実施した。これは、修飾部とヘッドの意味的な関係による誤用の傾向を双方向的にみるためである。

#### (9) 日本語学習者と中国語学習者の双方向的検討

HSK 動的作文コーパスにおいて、中国語学習者に「的」の過剰使用が多くみられた(5)の a,b,c のケースと、KY コーパスにおいて日本語学習者に「の」の脱落が多くみられた以下の3つのケースに関して、双方向的検討を行った。

d 修飾部がヘッドの「主」である場合

e 修飾部とヘッドが物・人とその周囲という関係である場合

f 修飾部がヘッドの内容や様式である場合

その結果、日本語学習者と韓国語学習者の言語構造の双方向的検討と同様、意味的な関係による双方向的検討においても、必ずしも誤用の傾向は表裏一体ではないことが明らか

かとなった。また、同じケースであっても名詞句によって、異なる傾向があることが明らかとなり、使用頻度の高い語彙や、四字熟語と認識しやすい語種なども関連していることが伺われた。対照言語研究だけでも、習得研究だけでも明らかにされてこなかった、言語転移の複雑さと、言語転移が起きやすい条件が示唆され、今後さらに詳細に検討する必要があることが示された。

→論文①で発表する。

#### 4. 研究成果

対照分析のみで予測できない事実から、言語転移の実態の複雑な作用や様相が伺え、言語間の双方向からのアプローチは、言語転移の原理を検討する新しい方法の一つとして、その有効性を指摘した。

言語転移の原理について、同じ形式を基に L1 日 L2 中 ←→ L1 中 L2 日、L1 日 L2 韓 ←→ L1 韓 L2 日 という「言語双方向」から調べる点が独創的であり、国際的にもこの手法による検討は少なく、日本語教育研究の分野、アジア言語を対象とした体系的な研究は本研究が初めてである。

また、本研究では、対照研究を専門とする研究者と習得研究を専門とする研究者により、対照研究と習得研究を有機的に結びつけることが出来た。対照研究、誤用分析、習得研究の三位一体となるこれらの研究成果は今後の研究モデルとして重要であり、意義のあることである(→論文⑥として発表)。

また、第二言語習得過程における言語転移以外の要因にも留意しつつ、言語転移のどのような要素が作用しているのかという言語転移のメカニズムの一端と課題を実証的に明らかにしたことは意義がある。

未だ不明な点の多い言語転移のメカニズムではあるが、その一端を明らかにする手法と

して、双方向的研究を実践しその有効性を示したことは言語転移研究へ貢献し得たと考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

①張麟声、日本語の「の」と中国語の「的」における双方向習得研究—修飾部が指示詞であるなど3ケースを例に(1)—、中国語話者のための日本語教育研究、第3号、2012、掲載確定

②張麟声、仮説検証型双方向習得研究について、中国語話者のための日本語教育研究、第2号、2011年、pp1-14

③奥野由紀子、金玄珠、漢字圏学習者の「の」の脱落における言語転移の様相 — 「の」「의」「的」の対応関係に着目して—、国立国語研究所論集、第2号、2011、pp77-89、<http://www.ninjal.ac.jp/publication/papers/02/pdf/NINJAL-Papers0204.pdf>

④張麟声、日本語を母語とする中国語学習者の「的」の過剰使用について(1)—連体修飾マーカ—の日本語中国語双方向習得研究の立場から—、大阪府立大学人間社会学部言語文化学科、査読有、第6号、2010、pp.1-15

⑤奥野由紀子、金玄珠、日本語学習者の「の」の脱落に関する一考察—横断的発話資料に基づいて—、横浜国立大学留学生センター教育研究論集、査読有、17号、2010、pp.45-65

⑥張麟声、対照研究・誤用分析・習得研究三位一体の研究モデルについて、大阪府立大学人間社会学部言語文化学科、査読有、第5号、2010、pp.1-19

⑦金玄珠・李叔宜 「名詞句における「の」と「ウイ」の日韓対照研究—コーパスを用いた「地名+N」の意味分類を中心に—、横浜国立大学留学生センター教育研究論集、査読有、17号、2010、pp.27-44、

[学会発表] (計4件)

①奥野由紀子、日本語学習者の「の」の脱

落から見えてくるもの —コーパスと文法性判断テストの分析から—、多文化共生社会における日本語教育研究 研究発表会、2011年11月13日、国立国語研究所

②奥野由紀子、金玄珠、『の』の脱落における言語転移の可能性—文法性判断テストによる検討—、Seventh international conference on Practical Linguistics of Japanese(ICPLJ7)、2011年3月6日、San Francisco State University

③奥野由紀子、金玄珠、羽渕由子、韓国語人学習者の名詞句に関する文法性判断の特徴:「の」の脱落を中心に、韓国日語日文学会 2010年度冬季学術大会、2010年12月18日、建国大学(韓国)

④金玄珠、奥野由紀子、名詞+名詞における韓国人学習者の「の」の脱落の検討、韓国日本文化學會第35回(秋季)、2009年10月24日、韓国京畿道所在烏山大學校(韓国)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

奥野 由紀子 (OKUNO YUKIKO)

横浜国立大学・留学生センター・准教授  
研究者番号：80361880

##### (2) 研究分担者

張 麟声 (Zhang LinSheng)

大阪府立大学・人間社会学部人間社会研究科・教授  
研究者番号：80331122

##### (3) 海外研究協力者

金 玄珠 (KIM HYONJU)

又松大學校・教養教育院日本語センター・招聘教授